

牛久沼今昔 第二話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

代官頭(のちの関東郡代)伊奈忠次・忠政・忠治による管掌①

利根・毛野(鬼怒)両川流路変更と相馬二万石・谷原三万石新田開発と牛久沼沼域確定

地方巧者の伊奈忠次・忠政・忠治

安土桃山時代の天正18年(1590年)7月、豊臣秀吉の侵攻で関東一円に勢力を張っていた北条家が小田原落城によって滅亡した。

かわつて秀吉の命令の下で、徳川家康が関東へ入国したが、所領は北条家の旧領地である相模・武蔵・上総・伊豆4力国と、上野・下総の大部分、そして下野の一部分と、別在京賄料としての領地を加えると、合計が250万石に及び、豊臣政権下での大大名であった。

同年8月、家康は江戸城に入城した。家康は早速、有力家臣への領地宛行い及び検地などに着手した。

家康は有力家臣への領地宛行いを最も重視し、総奉行に武功派の重鎮榊原康政を充て、総奉行支配の代官

頭に伊奈忠次、大久保長安、彦坂元正ら吏僚派を充てて作業を急がせた。家康の家臣団の中で、(群雄割拠による)下剋上の機運さかんな戦国期は織田信長の政権確立までであったが(武功派がまたまた幅を利かせており、手堅い吏僚役人)は少数派であった。

伊奈忠次の場合は、江戸幕府開設後も代官頭(数名の代官を統括していた)に再任され、関東八力国に分布する10万石余の幕府直轄領(天領)の民政全般にわたり管掌し、忠次、忠政、忠治三代は領民(伊奈神社や忠治の眼病治療を祈願して薬師堂を建立するなど)も信頼を寄せる名代官であった。忠次が遂行した地方仕法は、彼が従五位下・備前守に叙任されたことにちなんで備前検地、備前堀などと呼ばれ、一方で伊奈家相伝の治水工法は『伊奈流』(または関東流とも)と称され、これらはのちに幕府の普請工法の基本になった。

忠次の長男忠政は代官頭を世襲したが三十四歳で夭折したため、忠次の二男忠治が(のちに関東郡代という役職名になる)世襲。忠治と牛久の主たる関わりは、忠治総指揮の下で、寛永4年(1627年)から同11

年(1634年)にかけて、ひと続きの小貝川と牛久沼の間に延長二千年(3640メートル)に達する『かい堤(通称二千間土手)』が築かれ、この大普請によって、牛久沼の沼域の確定を見たことであった。

家康の譜代幕閣(老中)

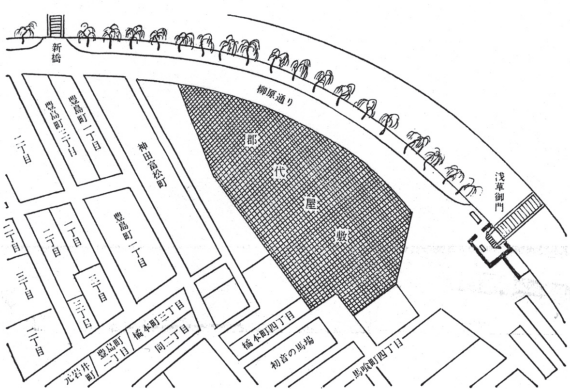
以外の主たる側近

家康は長年、多方面にわたって、しかも周到に配慮を重ね、ついに江戸幕府265年の基を開いた。一方で家康には側近の家臣が数多あり、基礎立に深く関わっていた。それらの側近の家臣の中で譜代幕閣(老中)以外の主たる顔ぶれを次に列記してみた。陸運用の五街道整備と各街道への一里塚設置を代官頭大久保長安(猿楽師。のちに金・銀山奉行)に命じ、もう一方の物資運搬手段の舟運の水路(畿内の保津川や富士川の開削)整備などに豪商の角倉了以をあてた。『家康の財務長官』

といわれた彫工の家の出の後藤光次を抜擢している。茶屋四郎次郎は、家康に深く信頼された武勇の功臣ながら転じて安南(ベトナム)貿易に関わった。

長谷川藤広は、長崎奉行をつとめ家康に「キリシタン禁令」を発するよう献策した。呉服商出の亀屋栄仁は、本能寺の変のとき伊賀越えて三河に逃れる家康に随従した。アダムス(イギリス人。

日本名三浦按針)を外顧問に用いた。家康が、豊臣家(世嗣秀頼)討滅の戦略を立ててその謀略をめぐらすと、崇伝(臨濟宗高僧で黒衣の宰相と評された家康の腹心)と天海(天台宗大覚寺派大僧正で家康・秀忠・家光三代に仕え黒衣の宰相といわれた)は豊臣家が再建した京都方広寺大仏殿の梵鐘の銘『国家安康』は『家康』を分断している、『君臣豊楽』は豊臣家のみを繁栄をうたうもの、と問責の使者として、大坂城(豊臣家)へのりこんだ。家康は儒学を奨励していたが、家康が召し抱えた儒学者第一号の林羅山も梵鐘の銘『君臣豊楽』を『豊臣を君として』読などと家康に阿諛した。家康は作戦通り、方広寺梵鐘事件を惹起し、大坂の役(冬夏の陣)を仕掛けて豊臣家討滅に成功した。



関東郡代屋敷の位置(嘉永版「江戸切絵図」)